

令和元年度病虫害発生予報第 4 号

長崎県病虫害防除所長

【予報の概要】

農作物名	病虫害名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
早期水稲	いもち病（穂いもち）	—	並
	紋枯病	並	並
	穂吸汁性カメムシ類	やや少	やや少
普通期水稲	いもち病（葉いもち）	やや少	並
	紋枯病	並	並
	縞葉枯病	やや少	やや少
	セジロウンカ	やや少	やや少
	トビイロウンカ(防除情報第8号)	並	やや多
	コブノメイガ(防除情報第8号)	やや少	やや少
大豆	ハスモンヨトウ	—	並
いちご (育苗床)	うどんこ病	少	少
	炭疽病 (<i>G. cingulata</i>)	少	やや少
	輪斑病	並	やや多
	ハダニ類	やや多	やや多
アスパラガス	斑点性病害（褐斑病、斑点病）	少	やや少
	アザミウマ類	やや少	やや少
かんきつ	かいよう病	並	並
	黒点病	やや少	並
	ミカンハダニ	やや少	やや少
	チャノキイロアザミウマ	並	並
びわ	がんしゅ病	やや少	やや少
	灰斑病	並	並
	ナシヒメシンクイ	並	並
なし	黒星病	やや少	やや少
	ナシヒメシンクイ	並	並
ぶどう	べと病	やや少	やや少
果樹共通	カメムシ類	少	少
茶	炭疽病	やや少	やや少
	チャノキイロアザミウマ	少	少
	チャノコカクモンハマキ	やや少	並
	チャノホソガ	並	並
	カンザワハダニ	多	多
	チャノミドリヒメヨコバイ	多	多
	クワシロカイガラムシ	やや多	やや多

早期水稲

1. いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（39筆）の結果、葉いもちの発病株率は0.4%（2.2%）、発生圃場率は33.3%（24.1%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、葉いもちの発生を認めなかった（発生を認めない）。

ウ 向こう1か月の気温は低く、降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（39筆）の結果、発病株率は0.6%（0.2%）、発生圃場率は12.8%（7.4%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は8.0%（22.9%）であった。

3. 穂吸汁性カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期のイネ科雑草におけるすくい取り調査（26地点）の結果、捕虫網による10回すくい取りあたり虫数は5.3頭（9.5頭）であった（表）。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

種類別	10回すくいとり当り虫数						発生地点率	
	H27	H28	H29	H30	平年	R1	平年	R1
ホソハラカメムシ	0.9	0.4	0.8	1.1	0.6	0.2	63.2	50.0
クモヘカメムシ	0.1	0.2	0.0	1.0	0.2	0.2	27.7	38.5
シラホシカメムシ	0.1	0.1	0.4	0.1	0.2	0.2	43.1	30.8
アサジカスミカメ	5.5	7.2	7.6	7.8	8.2	5.0	83.8	82.1
ミナミアオカメムシ	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	5.3	3.8
計	6.2	7.6	9.2	9.7	9.5	5.3		

注) 数値は10回すくい取りあたりの虫数

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降の水田周辺の雑草地を除草すると本田へのカメムシ類の飛来を助長するので行なわない。

イ 本田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布すると効果が高い。また、周辺雑草地も含めて広域一斉防除をおこなうと防除効果が高まる。

ウ ミナミアオカメムシは斑点米を発生させる能力が高いので圃場での発生に注意する。また一部の薬剤で感受性の低下が報告されているので、薬剤の選定にあたっては十分注意する。

普通期水稻

1. いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（86筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.1%、発生圃場率2.5%）。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率0.4%）。

ウ 向こう1か月の気温は低く、降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

エ 葉いもちの感染に好適な条件を満たした日は下表のとおりである（葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照）。

月日	長崎	佐世保	島原	平戸	松浦	厳原	芦辺	福江	大瀬戸	口之津
7月1日	—	●	—	—	—	—	●	●	—	—
7月2日	—	—	—	4	●	—	●	—	—	—
7月3日	●	●	—	●	—	—	—	4	—	—
7月4日	4	—	●	●	—	—	●	—	—	—
7月5日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月6日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月7日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月8日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月9日	—	●	—	—	—	●	—	—	—	—
7月10日	—	●	—	—	●	—	—	—	●	—
7月11日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月12日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月13日	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—
7月14日	●	●	●	4	—	—	—	4	—	—
7月15日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

発生指標	?:判定不能	—:好適条件なし	1:準好適条件1	2:準好適条件2	3:準好適条件3	4:準好適条件4	●:好適条件
------	--------	----------	----------	----------	----------	----------	--------

* 感染した場合、感染好適と判断された日から7～10日後に病斑発現

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（86筆）の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率0.0%、発生圃場率0.1%）。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（86筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率0.3%）。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

- ウ 7月前期の巡回調査（86筆）の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭（0.0頭）、発生圃場率は20.9%（21.9%）であった。
- エ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭（0.1頭）、寄生株率は3.0%（7.1%）であった。

4. セジロウンカ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査（86筆）の結果、株当たり虫数は0.1頭（0.3頭）、発生圃場率は37.2%（54.9%）であった。
- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、株当たり虫数は1.1頭（2.1頭）、寄生株率は58.5%（60.0%）であった。
- ウ 7月3半旬までの飛来は平年より少ない。

5. トビイロウンカ

令和元年7月17日付け**病害虫発生予察防除情報第8号**による。

6. コブノメイガ

令和元年7月17日付け**病害虫発生予察防除情報第8号**による。

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は平年並で推移している（図）。

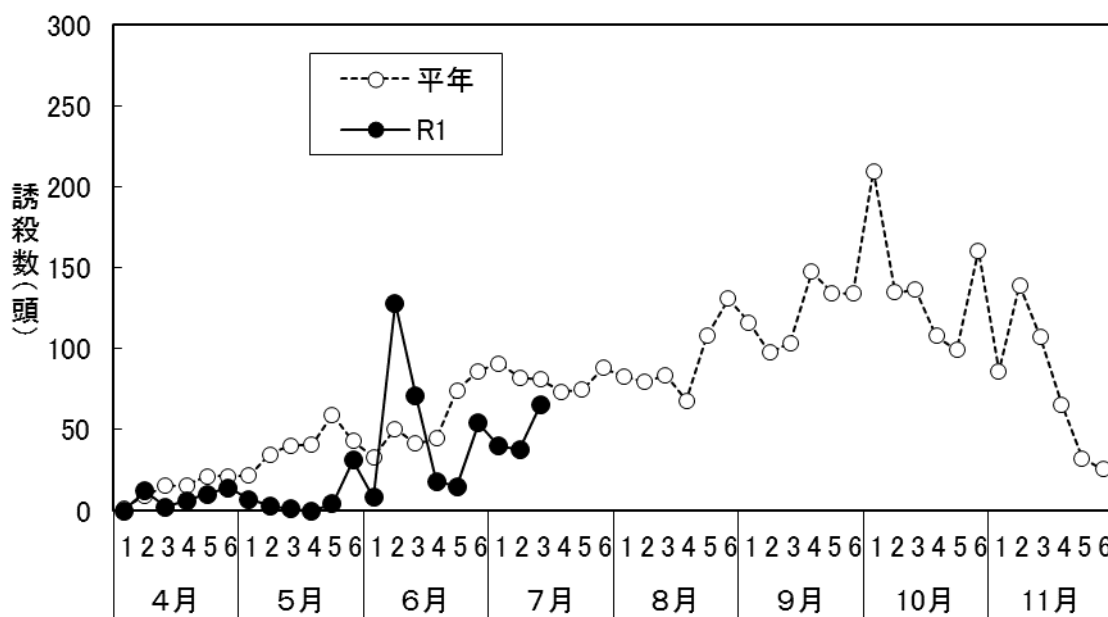


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越) (月・半旬)
平年:H21~H30年の平均値(最大・最小値除く)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。
- イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期に薬剤散布する。

いちご

1. うどんこ病

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(30筆)の結果、発生を認めなかった(発病株率1.8%、発生圃場率19.7%)。

2. 炭疽病 (*G. cingulata*)

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(30筆)の結果、発病株率は0.0%(0.0%)、発生圃場率は3.3%(3.8%)であった。

イ 向こう1か月の降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗床が多湿にならないように、長時間のかん水はしない。ポット間隔を十分にとり、排水対策を確実に行う。また、除草を徹底するなど、環境整備に努める。

イ 育苗床は全面マルチを行い、降雨等による地面からの病原菌の跳ね上がりを防止する。また、雨よけ施設がある育苗床では雨よけを行う。

ウ 発病した子苗およびその周辺の苗は速やかに処分する。また、発病した親株から採苗した子苗は育苗せずに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。

エ 葉の展開間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。特に長雨、台風などの前後、下葉除去など株を傷つけるような作業後は重点的に行う。

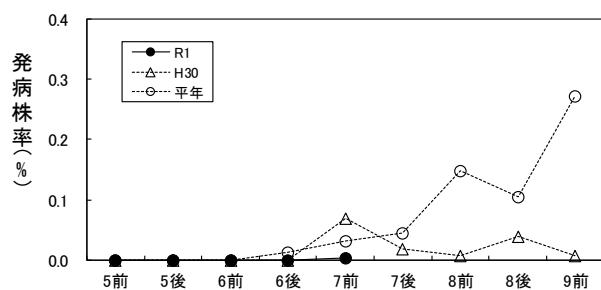


図 炭疽病 (*G.cingulata*) 発病株率の推移

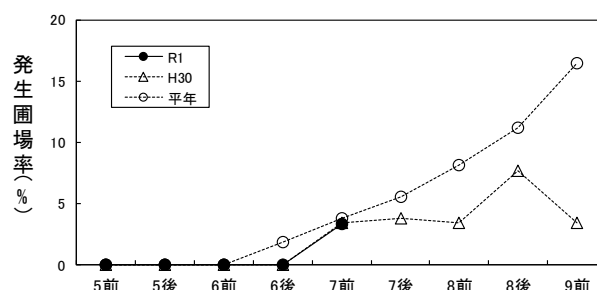


図 炭疽病 (*G.cingulata*) 発生圃場率の推移

3. 輪斑病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(30筆)の結果、発病株率は4.2%(5.7%)、発生圃場率は46.7%(41.7%)であった。

イ 向こう1か月の降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

4. ハダニ類

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(30筆)の結果、寄生株率は7.3%(2.4%)、発生圃場率は40.0%(20.0%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本圃への持込みを避けるため、定植までの防除対策を徹底する。
- イ 下葉の裏に多く寄生するので薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布する。
- ウ 薬剤感受性が低下しやすいので、同一系統の薬剤は連用しない。
- エ 薬剤感受性低下の恐れが少なく土着天敵に影響の少ない気門封鎖剤を活用する場合、これらの薬剤は卵に対する効果が低いので5~7日おきに連続散布を行う。

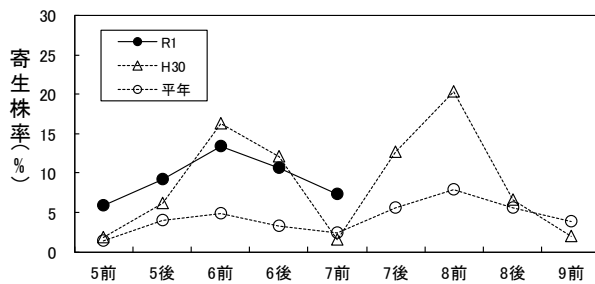


図 ハダニ類 寄生株率の推移

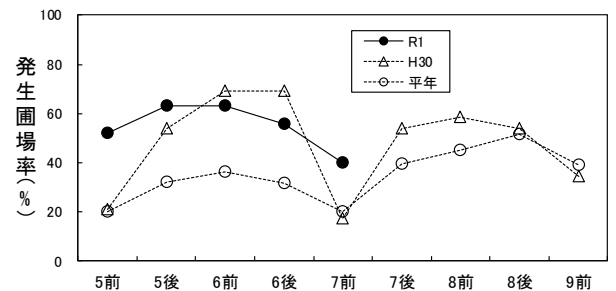


図 ハダニ類 発生圃場率の推移

アスパラガス

1. 斑点性病害

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(12筆)の結果、発病側枝率は0.2%(1.3%)、発生圃場率は8.3%(29.9%)であった。

イ 向こう1か月の降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

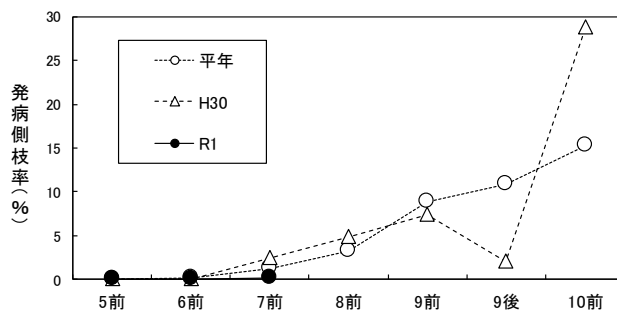


図 斑点性病害 発病側枝率の推移

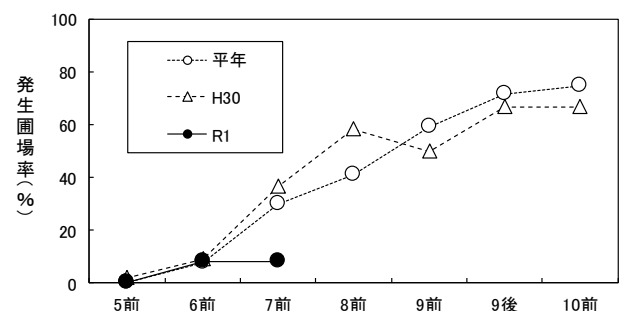


図 斑点性病害 発生圃場率の推移

2. アザミウマ類

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、払い落とし虫数(10.5cm×22.5cmの白色板に5回×10ヶ所)は5.8頭(9.3頭)、発生圃場率は25.0%(69.9%)であった。

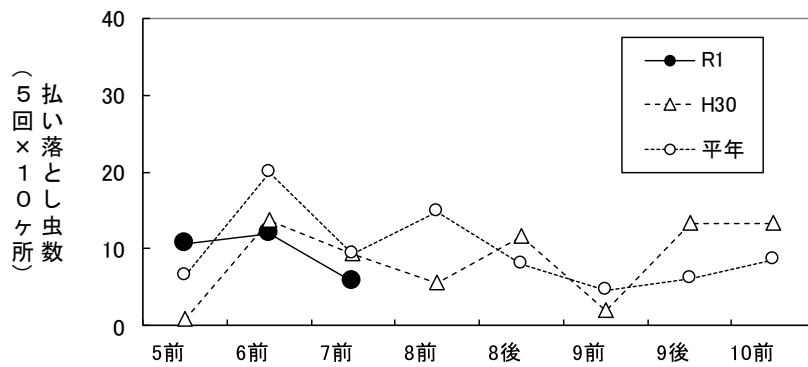


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移
※払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

かんきつ

1. かいよう病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(36筆)の結果、発病葉率は0.0%(0.1%)、発生圃場率は13.9%(5.8%)であった。

2. 黒点病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(36筆)の結果、発生を認めなかった(発病果率1.8%、発生圃場率15.8%)。

イ 向こう1か月の降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(36筆)の結果、寄生葉率は3.4%(11.4%)、発生圃場率は33.3%(47.3%)であった。

4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(36筆)の結果、被害果率(果梗)は0.1%(0.3%)、発生圃場率は5.6%(7.9%)であった。

イ 黄色粘着トラップ(諫早市)による誘殺量は、平年より少なく推移している(図)。

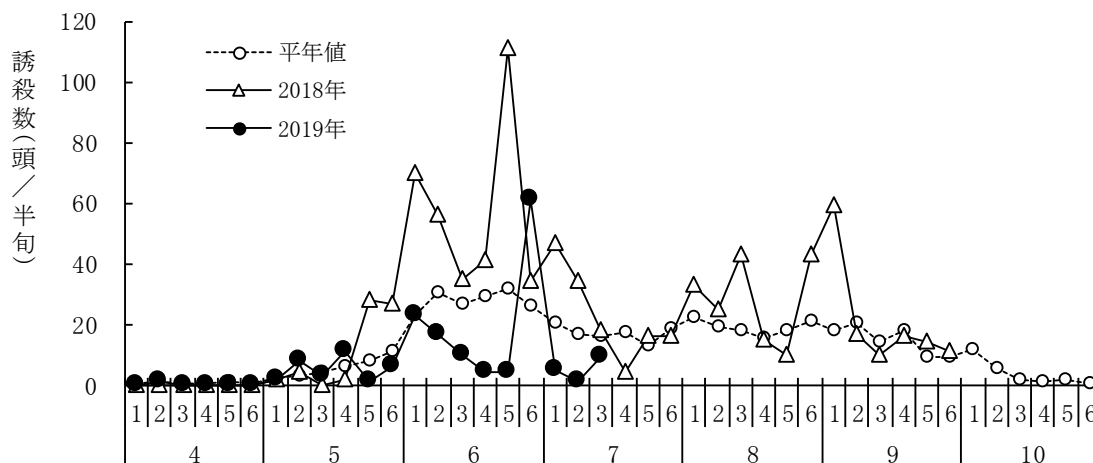


図 チャノキイロアザミウマの誘殺状況 (月・半旬)
(諫早市小船越町:黄色粘着トラップ)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した発生ピーク予測日を下表に示した。

イ 茶、かき、ぶどう及びイヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

表 有効積算温度計算シミュレーションによるチャノキイロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日

地点	長崎	佐世保	大瀬戸	口之津	平戸
第4世代	7/18	7/18	7/27	7/20	7/30
〃 (平年)	7/20	7/26	7/28	7/21	8/2
〃 (前年)	7/12	7/13	7/21	7/14	7/24
第5世代	8/4	8/4	8/13	8/5	8/17
〃 (平年)	8/5	8/11	8/15	8/6	8/20
〃 (前年)	7/28	8/2	8/7	7/30	8/11
第6世代	8/20	8/21	9/1	8/22	9/5
〃 (平年)	8/22	8/29	9/2	8/23	9/9
〃 (前年)	8/13	8/18	8/24	8/16	8/28
標高(m)	27	4	43	10	58

注1: 発生ピーク予測日は気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した。なお、積算には2019年7月15日までは観測値を、以降は平年値を使用した。

注2: 同一地区内でも、山間部では発生ピーク予測日が異なる場合があるので注意する。また、今後の気象条件により予測日は前後する場合がある。

注3: 表中の発生ピーク予測日の5日前から発生ピーク予測日の期間に薬剤散布をすると防除効果が高い。なお発生が多い園では、1果当たり寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

び わ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(10筆)の結果、発生を認めなかった(発病枝葉率0.6%、発生圃場率23.8%)。

2. 灰斑病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(10筆)の結果、発生枝葉率は23.2%(29.9%)、発生圃場率は100%(96.3%)であった。

3. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(10筆)の結果、発生を認めなかった(10ヶ年平均寄生枝葉率0.0%、発生圃場率1.0%)。

イ 諫早市小船越町のフェロモントラップの誘殺量は平年より少なく、長崎市茂木は平年並で推移している(図)。

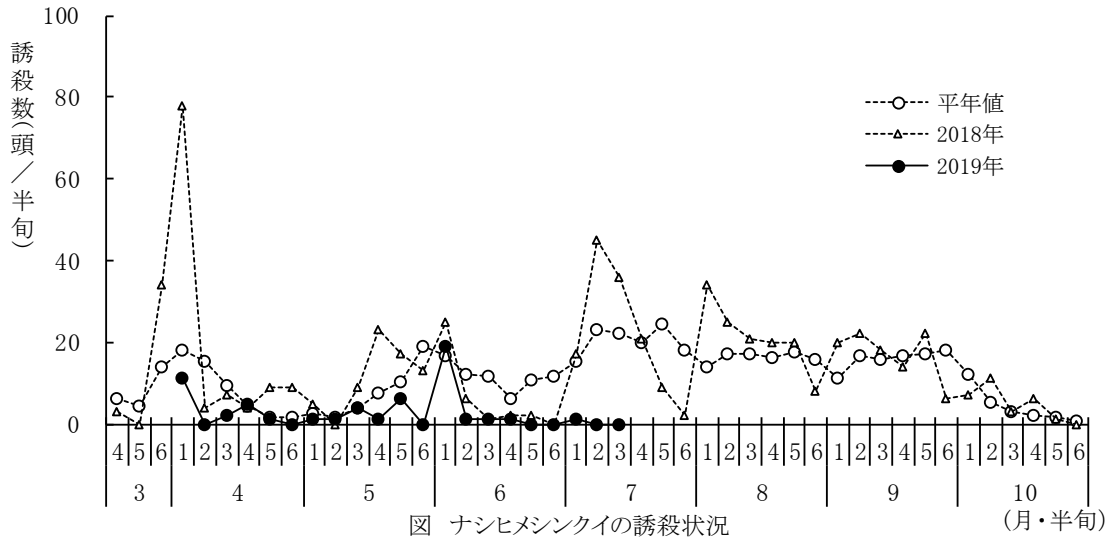


図 ナシヒメシンクイの誘殺状況
(諫早市小船越町:フェロモントラップ)

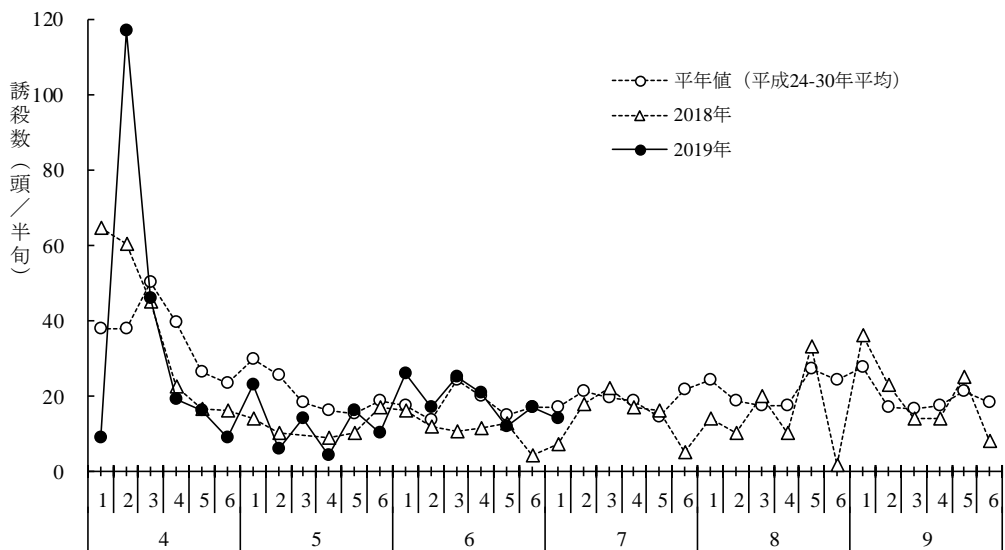


図 ナシヒメシンクイの誘殺状況(長崎市茂木・フェロモントラップ) (月・半旬)

なし

1. 黒星病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、発病葉率は0.2%(2.3%)、発生圃場率は33.3%(42.0%)であった。

2. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(12筆)の結果、発生を認めなかった(過去3か年発生を認めない)。

イ 諫早市小船越町のフェロモントラップの誘殺量は平年より少なく、長崎市茂木は平年並で推移している(びわの項参照)。

ぶどう

1. ベと病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、発病葉率は0.0%(2.5%)、発生圃場率は16.7%(31.3%)であった。

果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

フェロモントラップの誘殺量は、諫早市、南島原市、西海市で平年より少なく推移している(図)。

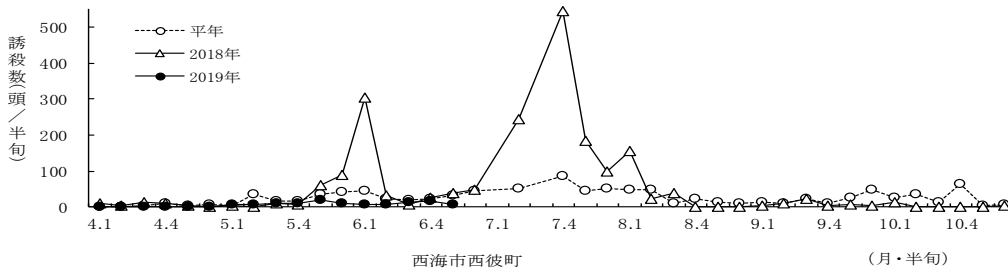
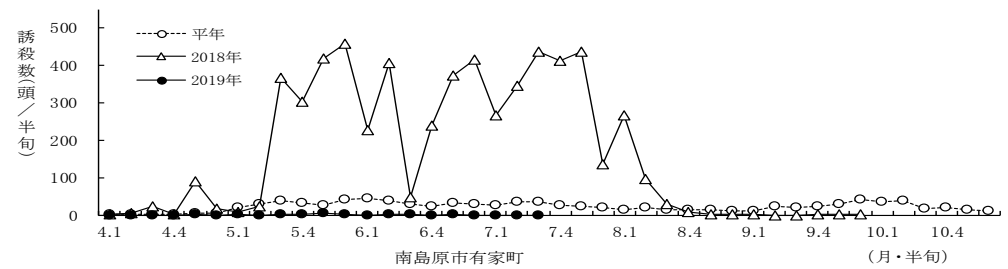
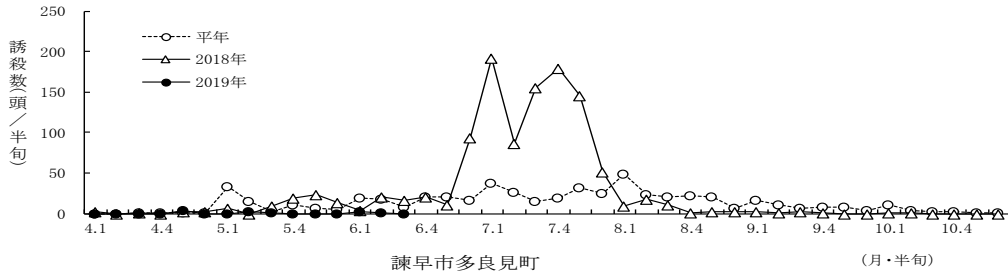
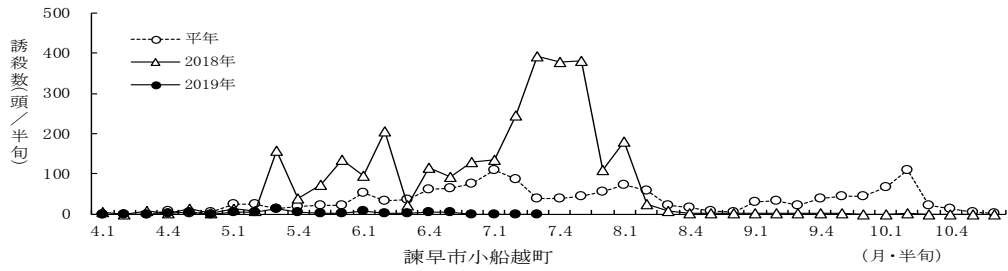


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネコロール)

茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(17筆)の結果、発生を認めなかった(1㎡当たり発病葉数2.9枚、発生圃場率54.4%)。

2. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(17筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は1.8頭(11.3頭)、発生圃場率は41.2%(88.1%)であった。

3. チャノコカクモンハマキ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（17筆）の結果、発生を認めなかった（1㎡あたり巻葉数0.2枚、発生圃場率12.7%）。

イ フェロモントラップによる誘殺量（農林技術開発センター茶業研究室調査）は、6月5半旬にピークが見られ、平年より多く推移している（図）。

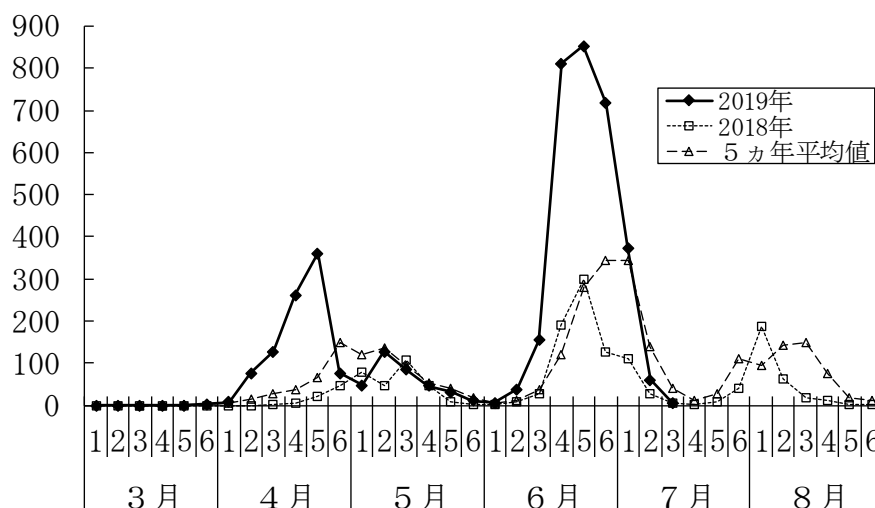


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況（東彼杵：フェロモントラップ）

4. チャノホソガ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（17筆）の結果、1㎡あたり巻葉数は0.1枚（0.1枚）、発生圃場率は5.9%（6.5%）であった。

イ フェロモントラップによる誘殺量（農林技術開発センター茶業研究室調査）は、7月2半旬にピークが見られ、平年並に推移している（図）。

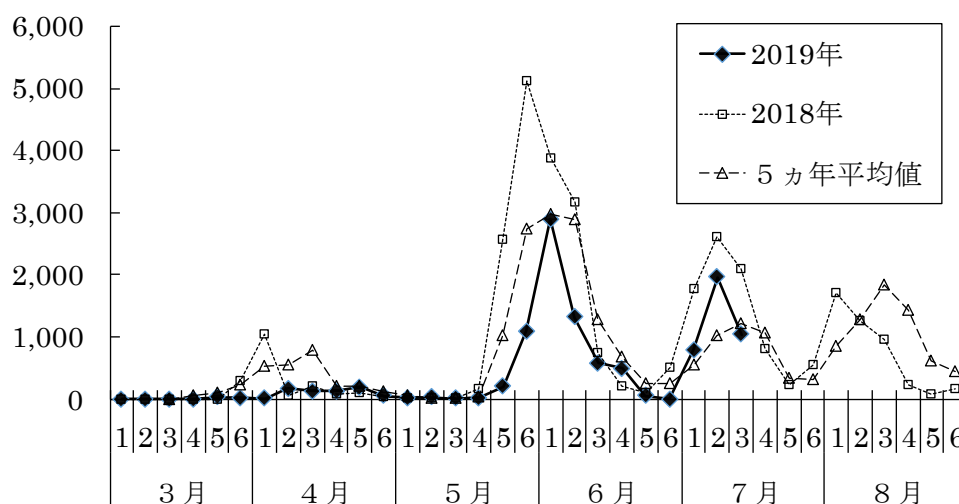


図 チャノホソガの誘殺状況（東彼杵：フェロモントラップ）

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（17筆）の結果、寄生葉率は2.9%（0.2%）、発生圃場率は35.3%（8.8%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉裏にも薬液が十分かかるよう散布する。

イ 薬剤感受性低下防止のため、同一系統の薬剤は連用しない。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(17筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は12.9頭(2.8頭)、発生圃場率は94.1%(68.5%)で、一部多発生圃場があった。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤感受性低下防止のため、同一系統の薬剤は連用しない。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(17筆)の結果、寄生株率は22.4%(7.3%)、発生圃場率は58.8%(41.3%)で、一部多発生圃場があった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表のふ化盛期予測日を参考にし、ふ化盛期～5日後までに防除する。

イ 株内の枝や株元に薬液がかかるように十分量散布する。

表 「有効積算温度則による防除適期予測法」によるクワシロカイガラムシのふ化盛期予測日(第2世代)

地区名	標高(m)	令和元年	平成30年	平成29年	平年 (過去10ヵ年)
東彼杵町太の原	360	7/24	7/16	7/24	7/23
五島市上大津	77	7/17	7/10	7/12	7/14

注1) 方法は「有効積算温度則による防除適期予測法(農林技術開発センター茶業研究室)」により、東彼杵町太の原(農林技術開発センター茶業研究室による測定値)、五島市上大津(アメダスデータ)で予測した。

なお、それぞれ7月16日以降のデータは東彼杵町太の原過去5ヵ年平均、五島市上大津平年値を用いた。

注2) 気温が高くなるとふ化盛期が早まる可能性があるので注意する。

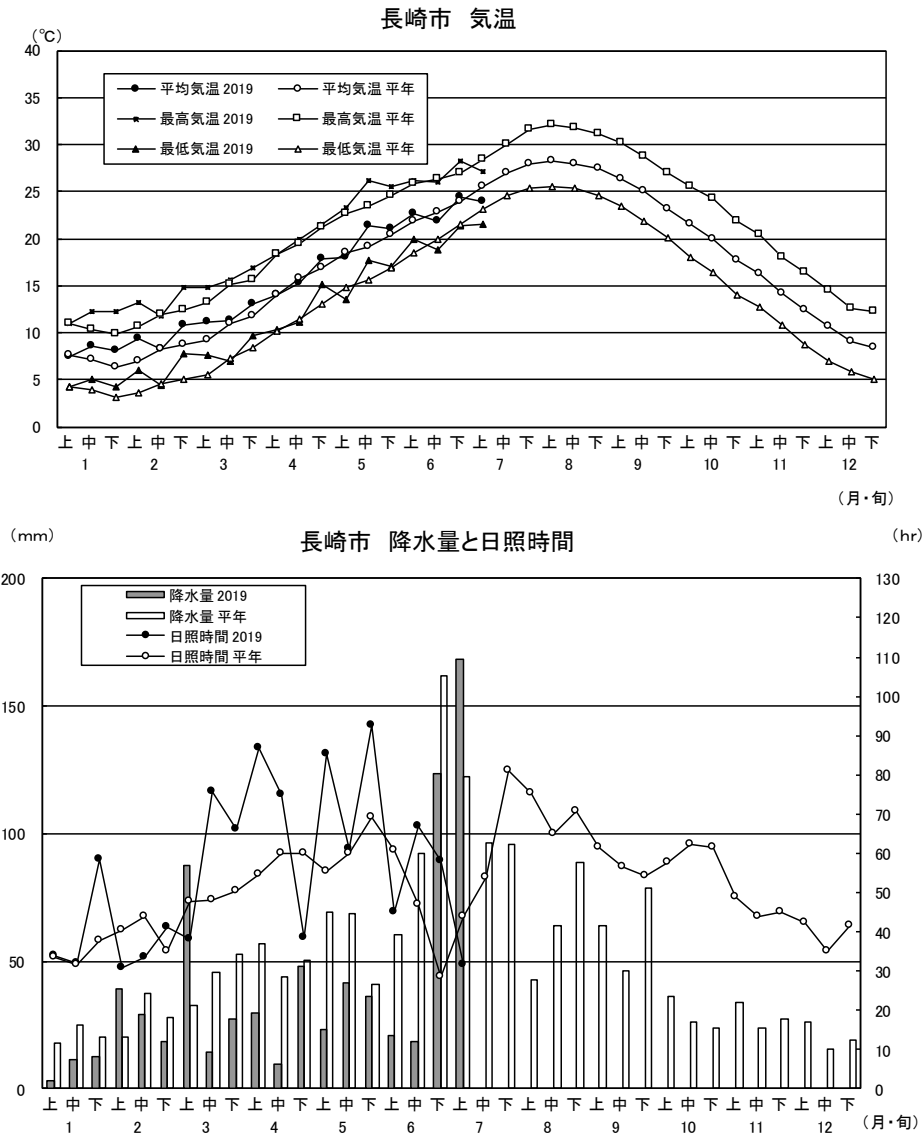
【参考】

(令和元年7月11日発表 1か月予報 福岡管区气象台)
要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	40	40	20
降水量	30	30	40
日照時間	40	40	20

※予報対象地域：九州北部地域

令和元年の気象経過（長崎地方气象台）



○6月1日から8月31日までの3か月間を「農業危害防止期間」と定め、農薬事故を防止する運動を実施しています。

○水稲穂吸汁性カメシ類防除のため水田に散布する殺虫剤により、「蜜蜂」に被害が生じる可能性がありますので、十分な配慮をお願いします。

○長崎県病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。

「長崎県病害虫防除所ホームページ」アドレス：<http://www.jpnpn.ne.jp/nagasaki>

○この情報に関するお問い合わせは、電話をお願いします。

長崎県病害虫防除所 TEL：0957-26-0027

